

シンポジウム「大学入試におけるコロナ対策： 令和 3 年度入試の舞台裏」のプレイバック

内田照久, 寺尾尚大 (大学入試センター), 石井秀宗 (名古屋大学),
林 篤裕 (名古屋工業大学), 中村裕行 (愛媛大学), 立脇洋介 (九州大学),
西郡 大 (佐賀大学), 宮本友弘, 久保沙織, 南 紅玉, 倉元直樹 (東北大学)

COVID-19 の感染拡大が深刻化した 2020 年, 個別大学が入試でどのようにコロナ禍に対応したのかを振り返るシンポジウムが 2021 年 12 月に行われた。それは, その前年の 2020 年度に, 外部非公開で 4 回行われた「コロナ禍の中での大学入試の危機対応に関する緊急オンライン・フォーラム」での議論を, トークテーマの形で掘り下げて再構成したものである。シンポジウムでは 2020 年を四半期ごとの 4 期に区切り, 各大学がその時々の課題をリアルタイムで検討してきた経過を報告した。その上で, 将来の大学入試の危機対応に向けて, 最も大切にすべきこと, 軸足となる考え方を議論した。さらに, 本報告ではそのような稀有な経験の記録を, 後世に残していく試みについても報告する。

キーワード: コロナ禍, オンライン入試, 大学入学共通テスト, 個別学力試験, 危機対応

1 はじめに

1.1 コロナ禍の個別入試を振り返るシンポジウム

去る 2021 年 12 月 19 日, シンポジウム「大学入試におけるコロナ対策: 令和 3 年度入試の舞台裏」がオンラインで開催された。これは COVID-19 の感染が深刻化した 2020 年, 個別大学が入試でどのように対応してきたのか, その 1 年間のリアルな検討過程を振り返る内容であった。

シンポジウムの開催にあたっては, 実施運営を東北大学の科研プロジェクト(課題番号 21H04409)が担当して主催した。そして, プログラムの内容・構成は, 大学入試センターの研究プロジェクトが共催で担当するという, ハイブリッドな体制での対応となった。

2 シンポジウム開催の趣旨と背景

2.1 COVID-19 の感染拡大と個別大学入試

2020 年からの, 世界的な COVID-19 の感染拡大は, 私たちの仕事や, 暮らしの形を大きく変えた。そして, わが国の「大学」にとっても, 教育, 研究, さらに「入試のあり方」そのものを, 大きく揺さぶるものであった。

2020 年は, 日増しに猛威を振るうコロナ禍の中で, 個々の大学は, 受験生を守りながら, 入学者の選抜を進めなければならないという厳しい難題と向き合って苦悩してきた。このシンポジウムは, その経緯を, 2020 年のカレンダーをめくり直す形で, 時間の経過に沿って振り返ることとした。

2021 年度入試の個別学力検査では, 早期に 2 次試験の中止を決定した大学, 感染状況の様子を見ながら実施の可否を見極めようとした大学, 試験時間の短縮, 試験内容の変更を行った大学など, 様々な対応の処置が取られ, 奇しくも個々の大学の裁量・決断に委ねられているものが, いかにか大きいかを目の当たりにすることとなった。

その全てが初めての状況の中で, それぞれの大学がそれぞれに置かれた環境・条件で, 何を最も大切だと考え, どんな決断をしたのかに着目して振り返ることにした。その中から, 大学入試の中で守るべきものは何なのかを, 改めて見つめ直すこととした。そして, そこで考え抜いたことを, まだ見ぬ危機への対応のための体制の構築に向けた手がかりにしていきたい, という考えの下, 討論のテーマ設定を行った。

2.2 「緊急オンライン・フォーラム」の開催

今般, 大学入試センター研究開発部には, センターの外の研究者と連携して個別大学の入試の支援を行うという, ナショナル・センターとしてのミッションが加わった。そのつい矢先に, コロナ禍が発生した。

その危機的な状況に際して, 2020 年の 6 月, 大学入試センター研究開発部は, 『新型コロナウイルス禍における大学入試の在り方を考える』というテーマを据えて「緊急オンライン・フォーラム」を企画した。そして, 5 つの大学から, 大学入試センターにご縁があるアドミッションに携わる先生方に参加いただいた。

2.3 外部非公開のオンライン・フォーラムの実施

当初は、オンライン・フォーラムでの情報交換から生まれた知恵を、積極的に発信していく予定であった。しかし、各大学の検討段階での試案などが、そのまま一人歩きするようなことがあると、社会的な混乱も予想されるということで、その場での議論のやりとりは、まずは非公開の形で進めていくこととなった。

そして、1年間、四半期ごとに計4回、その時々々の課題を率直に出し合って、緊張感を持った話し合いがなされた。それは大学入試センターのスタッフにとっても、個別大学の通常の入試業務と並走しながら、実際の入試現場の戸惑いや悩みというものに直接触れるという、たいへん貴重な経験にもなったところである。

2.4 オンライン・フォーラムから公開シンポジウムへ

この緊急フォーラムに参加したメンバーが、本稿のシンポジウムに登壇する講演メンバーとなった。緊急オンライン・フォーラムの場では難しかった情報発信という当初の目的を、この公開シンポジウムの開催によって、ようやく実現できることとなった。

講演者は次の通りである(敬称略)。(1) 東北大学・高度教養 教育・学生支援機構：倉元直樹、(2) 名古屋大学・教育基盤連携本部・アドミッション部門：石井秀宗、(3) 名古屋工業大学大学院・工学研究科：林篤裕、(4) 愛媛大学・四国地区国立大学連合アドミッションセンター：中村裕行、(5) 九州大学・アドミッションセンター：立脇洋介。

なお、このメンバーで、大学入試センター理事長裁量経費による研究プロジェクトも進行中である。

2.5 新たなタイアップ体制の下でのシンポジウム運営

このシンポジウムでは、大学入試センターと個別大学との新たなタイアップ形式による開催に挑戦した。シンポジウムのプログラムの内容・構成は大学入試センターの研究プロジェクトが、会の実施運営は東北大学の科研プロジェクトが担当したところである。

実施運営は、東北大学・高度教養 教育・学生支援機構：宮本友弘、久保沙織、南 紅玉が従事した。

2020 年以來、2 年にわたるコロナ禍を経て、今後、学会やシンポジウムは、単なる web 開催だけでなく、対面実施とオンライン配信を同時に行うハイブリッドな開催形式がもとめられる。今回、そのような需要も意識して、複数台のビデオカメラの利用など、配信のための工夫もなされた。

その土台の上で、前半の司会を大学入試センター研究開発部：寺尾尚大、後半討論の進行を佐賀大学・アドミッションセンター：西郡 大が担当した。

3 シンポジウムの進行の概略

シンポジウムでは、まず縦糸として、4 回行われた緊急オンライン・フォーラムに対応する四半期ごとの時間軸を据えた。その都度都度に、検討しなけりなかつた事柄を精査した(図 1)。そして横糸には、コロナの感染者数が大きく異なっていた「地域差」に着目し、その温度差にも留意して検討した(図 2-3)。

次節から、四半期ごとのトークテーマの概要と共に、各期のハイライトを抜粋して報告する。シンポジウム全体の内容詳細については、公開された報告書を参照されたい(大学入試センター研究開発部, 2022)。

新型コロナウイルス関連の出来事と入試日程

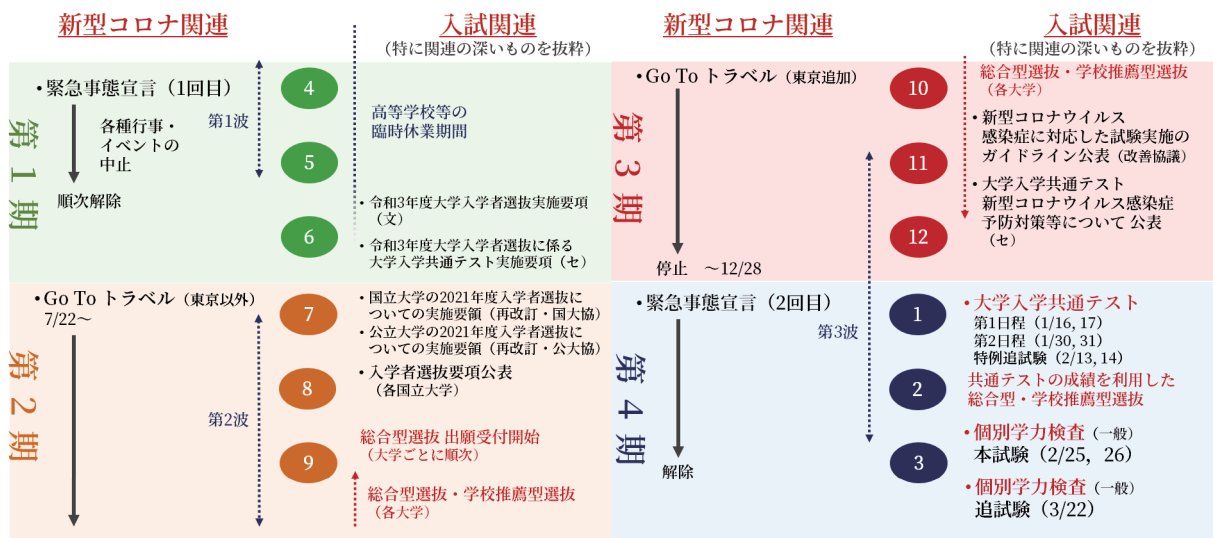


図 1 時系列に沿って 4 期に分割して進めたシンポジウムの進行と入試日程

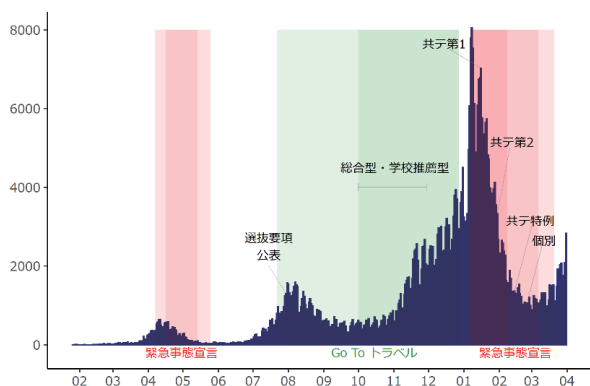


図2 新規陽性者数の推移（全国）

<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/open-data.html>
のオープンデータより作成

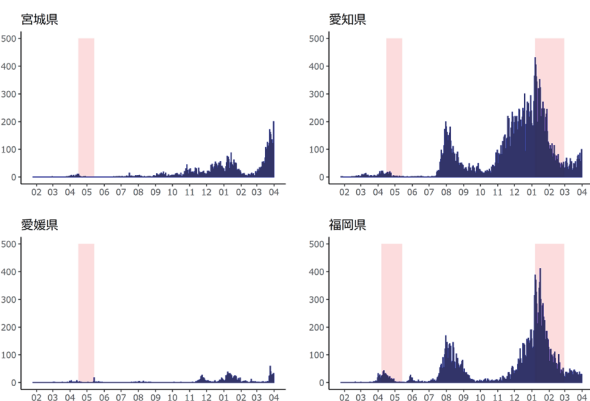


図3 新規陽性者数の推移（都道府県別）

3.1 第1期：2020.4～2020.6

3.1.1 第1期の主な入試業務と当時のトピック

第1期は、入学者選抜実施要項（文部科学省）及び、大学入学共通テスト実施要項（大学入試センター）をふまえて、各大学が入学者選抜要項を策定する時期である。先が見通せない不確実な情勢の中で判断がもたれられたため、第1回のフォーラムでは、苦悩の中で検討を進めてきた状況が報告された。

特に1回目の緊急事態宣言の発出後は、大学入試の根幹に関わる様々な議論が降って湧いてきた。中でも、秋入学の議論は、選抜日程に直接影響を与えるものであったため、大きな懸案事項となった。

また、県境をまたぐ移動に制限が設けられたため、県外からの受験生には、どのようにして試験を受けてもらったらいいのか、その入試広報をどう工夫するかも課題となった。加えて、受験機会の保障という観点から、追試験の設定も論点になった。選抜区分ごとの追試験の可否、さらに選抜方法に変更が生じた場合の周知方法の検討が課題となった。

3.1.2 第1期のトークテーマ

第1期のトークテーマは以下のようにまとめた。

令和3年度入試日程を検討する際の苦労

- ・都道府県境をまたぐ移動制限
- ・大学の行動指針との関係

個別学力検査の実施に関する温度感の違い

- ・「個別学力検査を必ず実施すべき」
- ・「共通テストの成績だけで選抜できるように」

不確実性の高い状況において各大学が重視したもの

- ・検討事項の詳細な洗い出し
- ・入試広報

3.1.3 第1期の話題から

上記のトークテーマの中から、「不確実性の高い状況において各大学が重視したもの」に関連した報告の中で、特に興味深かった事例を示す。

司会：寺尾 「各大学で重視したものという点で名古屋大学の石井先生と東北大学の倉元先生にお話を伺いしたいと思います。

名古屋大学では、共通テストが実施された場合・されなかった場合、一般選抜が実施された場合・されなかった場合といった、条件に応じた入試パターンのシミュレーションを、詳細にしていたという話を伺いました。」

名古屋大学：石井 「名古屋大学では連休が明けた5月の中旬から6月にかけて、そのようなものを作成していました。何かといいますと、共通テストが本当になかったらどうなるのだろうかとか、個別学力試験やれなかったらどうなるのだろうかというものを場合分けして、大学としてどのような対応が可能かということを示したフローチャートです。とにかくどうなるのだろうか、と言っているも仕方がないということで、それがもしあったら、部分的にでも実施されたら、共通テストがなかったら、などの場合に分けてまとめました。共通テストがあるパターンで11通りあります。共通テストがないパターンはお示しませんが、同様のパターン数のものをつくっていきました。

そして、そのときに試験日程がどうなるかとか、科目がどうなるか、時間がどうなるか、追試をどうするとか、とにかく色々なことをファクターとして挙げてフローチャートを作成していきました。

それぞれパターン分けしていたものとして、そこではどんな入試ができるのだろうか、どんなことが考えられるのだろうか、もし、このパターンになったらやらなければいけないのはここだ、ということを一覧表にして、どういう状況になっても、そのときに自分たちがどう動くべきか、ということが分かる状況をつくって

いました。

この一覧表の作成を入試課にお願いするわけにはとてもいきません。ただでさえ大変なのでそんなことをとても事務の方にお願ひできませんでしたので、もちろん入試課のほうにいろいろお伺いしながらですが、アドミッション部門のほうでこれらの資料を全部作っていったということです。

こういうのを作っていった背景ですが、とにかく学内の委員会のほうで入試をどうするのだ、というような形で、いろいろ言われる中、私たちがきちんと考えていますということを示すという意味で、また、我々の行動指針をきちんと定めておくために、これをつくっておきました。

これによって、アドミッション部門、入試課もそうですけども、学内全体が何とかかなりそうだな、何が来ても何とかかなりそうだな、というような形で、とにかくその当時の浮き足だった感じが収まる形になっていったかと思えます。

このような場合分けをすることによって、この後、アドミッション部門が、年末に向けていろんな資料を作成していくこととなります。つまり、共通テストも個別試験も、もし本当になくなったら、どんな選抜ができるのかということを考えてときに、いろんなこれまでの既存のデータを活用して、とにかく対策を立てようということで、アドミッション部門のその後の資料作成ということにもつながっていきました。」

司会：寺尾 「東北大学では入試広報や受験生への周知ということに重点を置かれていたという話でしたが、今の石井先生のお話と対比させながら、倉元先生、お願いいたします。」

東北大学：倉元 「そうですね、実際、我々も入試部門として活動しているわけですけども、学内に意識を割く余裕がなかったというのが正直なところでした。むしろ、外に向けて、受験生にどういった形で大学の情報をお伝えし、安心して受けていただける準備をするのかということについて整えていました。

ちょうど今日、技術スタッフを東北大学のほうで引き受けていますけれども、宮本先生中心に、通常対面で実施している広報活動を全てオンライン化するのを短時間でやり遂げたというのがこの時期の話です。

最初に、東北大学の説明や、その年の入試の細かいことは話せないですけども入試の仕組みなどを御説明する、進学説明会・相談会というのがあったんですけど、これをいち早くオンライン化するというので、6月2日からでしたかね、もう既にサイトをオープンするというようなスピード感でやりました。

あと、通常だと大学入学者選抜実施要項が届けられて、6月の頭には選抜要項を出しているのですけれど、これができない状況の中で、様々な情報が大学に届いて、そこから決定のプロセスもあるものですからどうしても時間かかるのですよね。

その中でも、取りあえず、今、決まっていることを指導する先生方にお伝えする、入試説明会と呼んでいるものですが、これも7月の半ばぐらいからですかね、何とか、そのときに分かっている情報をお伝えするという形でオンラインから実施いたしました。

最後、メインイベントというか、対面のオープンキャンパス、東北大だと毎年5万人規模で来場者があるというようなものなのですけども、これができないものですから、これに代替するような大学の情報発信ということが課題でした。これは各学部の協力を得ながら、通常オープンキャンパスをやっている7月の末ぐらいにサイトを開設するというような形で、極めて、意識としては対外的にどんな情報をお伝えするかというふうに向いていたなということをこの時期に関しては思います。」

3.2 第2期：2020.7～2020.9

3.2.1 第2期の主な入試業務とトピック

第2期の入試業務としては、オープンキャンパス・進学説明会・高校訪問などの広報活動、総合型選抜・学校推薦型選抜の学生募集要項の公表（順次）、総合型選抜・学校推薦型選抜の出願受付などがあげられる。

第2回のフォーラムでは、総合型・学校推薦型選抜の具体的方法について情報共有が行われた。面接やグループ・ディスカッションの実施の可否や方法、追試験の実施については、各大学でかなり悩んだことが報告された。また、オンラインを活用した選抜方法については、工夫を凝らしつつ、離島・僻地などに住む受験生など、多様な環境にある受験生に対して丁寧な配慮に心を尽くした旨の報告があった。

3.2.2 第2期のトークテーマ

第2期のトークテーマは第3期の議論の前提を理解するためのものとして設定した。

総合型・学校推薦型選抜（第3期）に向けた基礎情報

- ・愛媛大学
早い判断が求められた／選抜方法を一部変更
- ・九州大学
オンラインの活用／募集要項の内容変更の周知
- ・名古屋工業大学
出願要件に「評定平均 3.5 以上」を追加
- ・東北大学
「緊急高校調査」の結果の紹介

3.3 第3期：2020.10～2020.12

3.3.1 第3期の主な入試業務とトピック

第3期の入試業務は、総合型選抜・学校推薦型選抜の実施、一般選抜の学生募集要項の公表、大学入学共通テストの出願受付、大学入学共通テストの監督者説明会などがある。

この第3回フォーラムの時点で、かなり厳しい感染状況下で大学入学共通テスト・個別学力検査を実施することが、ほぼ確定的となった。その中で本番を目前にした懸念や不安の声も上がった。例えば、体調不良の受験生がいた場合に、本試験での受験を取りやめて追試験に回ってもらう際の条件や、試験監督の先生の配置などの工夫の必要性などが指摘された。

加えて、入試に携わる教職員の過密スケジュール・過重労働、対面でなければできない業務などを考えると、そもそも繁忙期であるのに加えて、コロナで例年以上にさらなる緊張感と追加の対応が求められ、運営側にも相当の負担がかかるといった指摘もあった。

3.3.2 第3期のトークテーマ

第3期はコロナ禍の下、行われた各種選抜に迫った。

総合型選抜・学校推薦型選抜の実際

- ・例年と異なる選抜方法をとった大学の事例
- ・オンラインの活用

感染拡大下での共通テスト・個別学力選抜を目前にした戸惑い・不安と覚悟

- ・追試験受験資格
- ・試験監督者をはじめとする実施関係者の不安の声

3.3.3 第3期の話題から

3期のトークテーマの中から、「総合型選抜・学校推薦型選抜での『オンラインの活用』」に関わる現場の経験知が垣間見られた事例を示す。

司会：寺尾 「次に、九州大学の立脇先生、特にオンラインを使ったかなり画期的な選抜方法かと思えますので、特に詳しくお話を伺いたしたいと思います。よろしく願いいたします。」

九州大学：立脇 「本学では、1月の第2回の緊急宣言時に多くの学部が総合型・学校推薦型を実施しまして、36の募集区分のうち19、およそ半数の選抜で何らかの変更を実施しました。大半の学部に関しては、面接、口頭試問で対面だったものをオンラインに代えるということで、これは比較的スムーズに変更ができたものでしたけれど、それ以外に、以下のようなものがございました。

例えば、小論文を対面で実施する予定だったものをオンラインでの口頭試問と面接に切り替えた学部、小論文を課題図書を用いて郵送方式でレポートを提出し

てもらって、その代わりに、口頭試問を新しく追加して実施した学部、さらには、筆記の課題探求試験をオンラインで筆記試験を行なうとした学部、あとは、作成する課題をオンラインで実施した学部もございました。

本学で今年の5月に、半分の学部に対して実際実施してみてどうだったかということ聞き取り調査を行いました。

その結果、まず接続トラブルに関しましては、ほとんどの学部で大規模なものは生じておりませんでした。これに関しては、特に有効だったものは事前接続テストの実施です。これを高校生1名1名に対して実施したことで、当日のトラブルが最小限になっていました。

ただ、受験生のトラブルというのは少なかったのですけれど、大学のネットワークが、ダウンしたりとか、通信ソフトの大規模障害、具体的に言いますと、入試の1週間前にある有名なソフトが全世界的に使えなくなったということがございまして、こういう場合には入試そのものができなくなるということで、これは一学部とかの単位ではなくて大幅なバックアップ手段等を事前に検討しておく必要があるかと思えます。

あと学部から具体的に出てきた感想としまして、オンライン面接に関しては比較的实施をしやすい。これはコロナが落ち着いても遠方の受験生に対して積極的に利用するというのもオンライン面接だけなら可能かなという感想もございまして。

小論文から口頭試問等、やり方自体を大きく変えたものに関しましては、やはり、学部としてもかなり迷いがございました。本当に代替できているのか、十分に見たい能力が見られているのかということで、これについては入った学生に関して検証が今後も必要であろうということになっております。

また、実施した大学教員もそうですし、高校の先生方、受験生もそうですけれど、精神的、肉体的な疲労がすごかった。具体的に言いますと、コンピューターを使うテストが多かったので、比較的年配の先生よりも中堅どころの、コンピューターに詳しい先生が中心になって回していたところが多かったです。その先生方、担当だった先生方は例年の2倍から3倍の時間実施してマニュアルを作成したり、すごく印象的だったのが、総責任者だった先生が試験の1週間前はずっと血圧が普段よりも20から30高かったというような話もございました。やはり、綱渡りで実施していたということが本当に率直な感想でございまして。

もう一つ、技術的に可能な機能でもなるべくシンプルにソフトを使ったほうが良いということで、ある学部があるソフトに特有の機能を使った入試を実施しよ

うと思っていたんですけど、試験の2週間前にその機能を仕様変更されて使えなくなったということがございました。ですので、特定のソフトに特有な機能に依拠した入試というのは難しいので、なるべくシンプルなものにしたほうが良いということもございました。具体的なこととしては以上になります。」

3.4 第4期：2021.1～2021.3

3.4.1 第4期の主な入試業務とトピック

第4期の入試業務はまさに文字通り繁忙期で、大学入学共通テスト(本試験・追試験)、共通テストを課す総合型選抜・学校推薦型選抜の合格発表、個別学力選抜(前期・後期)と合格発表、追加合格の発表などが連日続く業務のピーク時期である。

第4期のフォーラムは年度明けの4月に実施した。怒涛の入試シーズンを終えた先生方から、共通テストや個別学力検査の実施の裏の真に迫った報告があった。初の共通テストの実施では、センターのガイドラインに沿って無事に試験を終了した大学があった一方で、臨機応変の対応が求められた大学もあった。

共通テストの第2日程を担当した大学では、たとえ受験者は少数であっても、本試験扱いの受験者と、追・再試験扱いの受験者では対応が全く異なるために、実的に2倍の入試業務の負担が求められた点についての指摘があった。

また、個別学力検査については、追試験作成・実施へのエフォートと、受験者の人数規模との関係の指摘があった。すなわち、入念に準備しても、受験者数がゼロとなる場合があるため、問題作成の負担と照らし合わせた際の追試の位置づけについて議論が交わされた。

3.4.2 第4期のトークテーマ

第4期のトークテーマは、コロナ禍での試験の実施運営面での話題をまとめた。

考えておいてよかったこと・予期しなかったこと

- ・共通テスト・個別学力検査実施のリアル
- ・追試験受験者はあとがない
- ・保健室、濃厚接触者、試験監督者、受験生の様子
- ・大学入学共通テストの本試験としての第2日程(出願時にあらかじめ希望)と、追試験としての第2日程を、同時かつ独立に走らせることになった苦勞

共通テスト特例追試験、個別学力検査の追試験

3.4.3 第4期の話題から

第4期のトークテーマの中から、「共通テスト・個別学力検査実施」に関わる準備段階からの工夫と当日の対応のリアルな事例を報告する。

司会：寺尾 「愛媛大学では共通テストの直前期に、かなり独特な対策を実施したとお伺いしました。その

具体とともに関係者の不安、こうした対策に対する受けとめがどうだったのかということについて中村先生にお伺いしたいと思います。」

愛媛大学：中村：「これは全大学共通ですけれども、大学入学共通テストの初年度であったこと、それから、愛媛県の場合、試験場が県内3か所になっていて、そのうち2か所が愛媛大学キャンパスになっています。そのため、教職員や学生を含む大学関係者がコロナウイルス感染ということになると、試験実施にも、実施体制にも影響が及び多方面に多大な影響が出るということを想定しまして、大学内の上層部の判断で決まったと聞いておりますが、共通テストの安全・安心な実施と、年末に帰省した学生に対する授業での安全面への確保の両面から対策を検討したということです。

具体的には、愛媛大学では12月までは対面の授業も5割程度実施していましたが、年明けの授業開始から2週間は学生に対しても全面的にオンラインのみの授業としたり、学生や教職員に対して感染拡大地域への移動自粛を要請して、万が一移動した場合にはきちんと自宅待機の期間を設けるということを要請していました。

そのため、実際に共通テストの際には混乱なく実施することができました。以上です。」

司会：寺尾 「試験室つながりで名工大の林先生にもお伺いしたいんですけど、名工大では体調不良者のための別室の設置を進める中でいろいろと困ったこととございますか、緊急出動のようなこともあったこととあったんですけど、このあたり詳しくお話をお伺いできないでしょうか。」

名古屋工業大学：林 「全国的にもどの試験会場も初めてのことであり、また、受験生自身も当然受験は初めてということで、これまでも入試の本部等にはいたわけですけど、当日は本当に緊張感があったということは今でもリアルに覚えています。

ご存じのとおり、特に初日というのはそれぞれの試験室に受験生を送り込まないといけない、しかも、開始時刻は決まっているということで、一種時間との勝負という中で受験生の受入れになります。入構する段階で発熱者が、もしくは、本人が熱がありそうだとということになってきますと、大学としては別室をつかっていくということになります。昨年に関しては、本学、もともと1.3倍の受験者(注：試験時間を1.3倍に延長する受験上の配慮を希望する受験者)を受け入れておりましたので、もともと別室があつて、それに応じて予備試験監督者というものもリストアップはしておったわけですが、発熱とか体調がすぐれないとい

う申出に対してそれぞれ対応をさせていただいた結果、予備試験監督者が枯渇をいたしました。私は本来は出ていってはいけないのですが、行かざるを得ないことになって、1コマだけではありますが、試験監督をさせていただきました。

監督側・本部側とともに、受験者側も非常に緊張した中でやりましたので、どう対応するのがよかったかというのは難しかったように思います。ただ、試験が始まってしまえば受験生も教室に入っていますので、その中で別室を、ある程度間隔が取れる部屋があると判明した段階で、次のコマから受験生を別の部屋に移動する形で試験監督者の数を減らす対策ができました。

けれども、やはり、朝の一番の寒い中でいろいろの申出がある中でどういうふうに対応するのが一番運営としていいのかというのは、ケース・バイ・ケースでやっていくしかないという中で非常に緊張しておりました。私以外の者もその状況を見ていたんですが、後々になって、あのときはすごくシビアだったねという話をしたのを今でも覚えております。

この1月は多分、同じような状況になるかと思うと、やはり、気を引き締めて1月対応していかなければいかんなどと思っておる次第です。」

3.5 総合討論：将来の緊急事態に備えて

3.5.1 総合討論のトークテーマ

総合討論では、個々の事案から少し離れて、対局的な観点から下記のテーマを据えて議論を進めた。

緊急事態における入試の「共同歩調」と「個別判断」

- ・国で（大学で足並みをそろえて）判断すべきこと
- ・個別大学で判断すべきこと

緊急事態における公平性・公正性の確保

共通テストの成績提供を予定通り行うことの重要性
 選抜方法・日程の変更が想定される中での受験生に安心してもらうための「基本的考え方」
 新型インフルエンザのときとの共通点・相違点は？

3.5.2 総合討論の話題から

ここでは、総合討論の司会の佐賀大学の西郡による冒頭の総括部分を示す(図4)。

司会：寺尾 「皆様には90分かけて2020年度の怒涛のコロナの下での大学入試を振り返っていただきました。それでは、ここからは佐賀大学の西郡先生にバトンタッチして、「総括：緊急事態下の各大学の入試を俯瞰してわかること」と題して、ディスカッションを進めていきたいと思います。西郡先生、どうぞよろしくお願いたします。」

佐賀大学：西郡 「佐賀大学の西郡です。ここからは私が司会を進行していきたいと思います。

これまでは一連の流れに沿っていろいろとパネリストの先生方にご発言いただきましたけれども、ここはプレイバック座談会という会の大きな趣旨に沿って自由に進めていきたいと思います。

その前に、先生方のいろいろな報告を聞いて私なりの感想を少し最初に発言させてもらいたいと思います。私の所属している佐賀大学はこのオンライン・フォーラムというものには入っていません。ですので、この会の司会の依頼があったとき、そんなことやってたのですかと、羨ましいなというのが率直な感想です。

もちろん、佐賀大学でも個々につながりのある大学と確認しながらいろいろと検討を進めていったわけですが、こうした新型コロナにおける緊急時の大学同士の情報交換がいかに重要なのかということに改めて思い知りました。

その中でどこまでそれぞれの大学で検討していくことになるのかとか、検討していかなければいけないのかということになってくるわけですが、どこまで見通してというところが非常に難しいところがあると思います。

名古屋大学の石井先生の話の中では、かなり詳細にシミュレーションされていて、あの資料を見た



図4 シンポジウムでの討論の様子(アルカディア市ヶ谷 私学会館 2021/12/19 [7F 白根])

きには本当に驚かされました。確かにいろんなケースを考えると、共通テストが実施される、しないとかです。ね、いろんな場合分けをしていくと無数にパターンが出てきます。県境をまたぐのが OK なのか、OK じゃないのか、そういった状況まで加味すると詳細なシミュレーションというのが非常に難しいということは、多くの大学が感じたところではないかと思います。

そうした中で、やはり、共通テストが実施できるか、できないかというところはとても重要な点で、個別試験も含めて、コロナにおける入試の対応として非常に重要な前提になったのではないかと思います。改めて共通テストの重要性を、私としては再認識したところでもあります。

一方で、追試験をどのように考えていくかということ、受験生を保護しようという観点から言えば、追試験を設けてしっかりと対応していこうということになっていくわけです。追試験をするということはそれなりに問題作成をしなければいけないということになります。そうしたときに、一般選抜の個別試験の予備問題をもろろん準備していますけれども、それ以外にも新たに入試ミスが出ないようにもう 1 セットつくらなければいけない。そうすると、問題作成の体制というのが非常に脆弱化している中で、さらに追加の問題作成をお願いするのは非常に厳しいというところが佐賀大学にはありました。

そうした中で、過去問の共同利用活用宣言にこれまで入っていないのですけれども、そこに参加することによって追試の問題を準備していこうということになりました。

一方で、総合型選抜とか学校推薦型におきましては、我々もオンライン面接とか、そういったことの検討はしたのですが、私たちの大学でタブレットを使った入試をこれまで平常時でもやっています、いかにそこで試験を公平な環境で行うことが難しいかを感じていましたので、オンラインは極めて難しいだろうなということ、総合型選抜も学校推薦型も全て追試を実施するという対応したところでもあります。

そのように、いろいろとやってきたわけですが、今日改めて各パネリストの先生方の報告を聞いて、やはり、いろんな考え方で検討されているのだなということを改めて感じたところでもあります。」

4. 今後の課題：大学入試の危機対応

本シンポジウムの開催が、まだ見ぬ大学入試の危機対応に少しでも役立つことを念じている。今後の課題は、まさに想定外の事案が頻発した令和 4(2022)年度

入試の振り返りと対応策の整理である。2022 年度入試では、下記の事案が連続して発生した。

1. オミクロン株による第 6 波のコロナの感染拡大の中で、濃厚感染者への対応が年末に二転三転。
2. もし共通テストが受験できなくても、個別試験で、別途、選抜するようにとの通達が突如出される。
3. 共通テストの初日に、試験会場の一つである東京大学前で男子高校生による刺傷事件が発生。
4. 翌日には、トンガの海底火山の爆発による津波で一部地域に緊急避難指示が出された。
5. 試験時間中に試験問題をスマートホンで撮影して送信するという不正行為が発生。

このようなことが実際に起こるのだという実感の下、さらに大学入試の危機対応を検討していく必要がある。

付記 記憶の継承に向けたシンポジウムの公開

本シンポジウムの貴重な議論を大学入試の危機対応に生かすことを目指して、記録動画の公開している。図 5 に QR コードと url リンクを示す。



<https://www.youtube.com/watch?v=ckCFj4S9cXI>

図 5 シンポジウムの配信用 url とその QR コード

謝辞

本シンポジウムの遂行にあたって、JSPS 科学研究費補助金 (JP21H04409)、及び、令和 3~4 年度 大学入試センター理事 長裁量経費、「大学入試をめぐる危機対応の体制構築に向けて—COVID19 の災厄を越えて—」の援助を受けました。

参考文献

- 大学入試センター研究開発部 (2022). シンポジウム「大学入試におけるコロナ対策 令和3年度入試の舞台裏」 大学入試センター.
[https://www.dropbox.com/s/b74mkee51085m7x/Symposium .pdf?dl=0](https://www.dropbox.com/s/b74mkee51085m7x/Symposium.pdf?dl=0)
- 渡辺教司 (2022). コロナ下の大学入試を振り返る —センターゆかりの研究者が「舞台裏」座談会— 内外教育 (2022年1月 11日付), 6-7.